みんなで生き方を考えよう！

文責：道徳主任

道 徳 教 育 だ よ り　7月号

上赤　義人

夏休みにこそ、語り合おう！

いのちについて、生きることについて

まもなく夏休みがはじまります。子どもたちが、家庭にいる時間が多くなる時期です。この機会にこそ、子どもたちと語り合う時間をつくってみるのはどうでしょうか。

しかし、話題となることがあまりなく、なかなか語り合うことが難しいという声も少なくありません。そこで、テレビや新聞でのニュースを取り上げたりすることも話題づくりのひとつになるはずです。

毎年のように夏休みのニュースになるのが、戦争や平和に関することがらです。平和の大切さやいのちの尊さ等について、私たちは感じています。また、東日本大震災をはじめとする自然災害等によって、多くのいのちが失われた事実は、すべての人々の記憶にも残っているはずです。

本校でも、日々の道徳の時間等を通して、子どもたちと語り合い、いのちについて考えることがあります。特に、7月10日(火)には、全クラスで「平和に関する授業」を実施しました。

この夏休み、様々な機会を捉え、子どもたちといのちについて語り合ってみてください。また、いのちについて考えることは、その人の生き方にもかかわるはずですから、生きることについても語り合うことができればすてきだと思います。

子どもたちは、子どもたちなりのしっかりとした考えをもっているはずですから・・・。

最後に、１９９５年の阪神淡路大震災後の１・１７ひょうごメモリアルウォーク２００４　追悼のつどい「遺族代表の言葉」を紹介します。

もしよければ、これを子どもたちと一緒に読んでいただければ幸いです。

9年前の1月17日、わたしたちの長男は、一歳半という短い人生を終えました。生きていれば今、小学校四年生です。わたしたちは、手を伸ばせば届くところに寝ていた息子を助けることができず、自分が生き残ってしまったことを責め続けて生きてきました。人見知りをしなかった息子が、震災の二ヶ月前からわたしの姿が見えないと泣くようになりました。天国でも、わたしを探して泣いている気がして、わたしは息子のそばに行くことばかり考えて生きていました。息子に一歳半から先の人生を送らせることができなかったという親としての悲しみは、わたしが生きている限り消えることはないでしょう。

亡くなった息子には、双子の妹がおります。震災後のわたしは、悲しみのために娘のことが見えなくなっていました。当時の娘は、大好きだったきょうだいを亡くしただけではなく、自分を見つめてくれる母親の存在も失っていたのかもしれません。娘も娘なりの悲しみを抱えてこの9年間を過ごしてきたことでしょう。それでも、幼い娘は、わたしが泣いていると、必ず「ママ、大丈夫だよ、将くんはここにいるから。」と励ましてくれました。

震災から3年後、西宮の慰霊祭に息子の名前が刻まれました。その日、「娘こそが、『あの時、生きていてほしかった』といつも願っていたわたしにとっての『生きていてくれた子供』なのだ」ということに初めて気がつきました。それから、わたしは娘が生きていてくれることに、心から感謝し、娘の悲しみについて、考えるようになりました。そして、息子の死には、父親、母親、きょうだい、そしておじいちゃん、おばあちゃんやその周りにいる人たちのそれぞれの悲しみがあることを知りました。

この9年間の出会いが、わたしを強く、そしてやさしくしてくれました。わたしの悲しみを否定せずそばに寄り添ってくれた人たちや、同じ経験をした人と出会い、悲しみを吐き出すことができたおかげで、再び笑うことができるようになりました。その家族や友人にこの場を借りて感謝の気持ちを伝えたいと思います。

これからも出会い一つひとつを大切にしていろんなことを感じ、考え、生きていくことが、亡くなった息子と生きてくれた娘のために、母親としてやれることではないかと思っています。

わたしは、息子の命を一歳半で終わらせたくはありません。震災で感じた悲しみを忘れることなく、あの時に得た支え合う心、やさしさ、命の尊さをしっかりと心に刻んで、考え、伝え続けていくことで、息子をはじめ、亡くなった多くの方の命がこれからも輝き、生き続けてくれるのではないかと思っています。

平成十六年一月七日

遺族代表の言葉